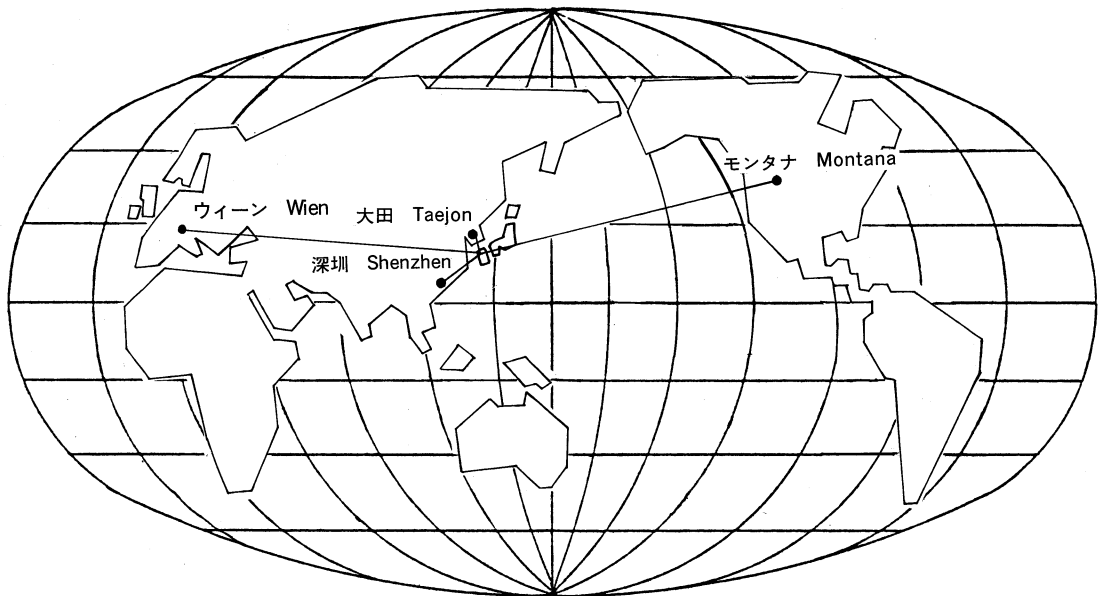


# 国際交流レター 第9号

## 着実にひろがる国際交流の輪



姉妹大学提携校：モンタナ州内9大学、大田大学、深圳大学  
 学術交流協定研究所：深圳大学、ウィーン大学

### CONTENTS

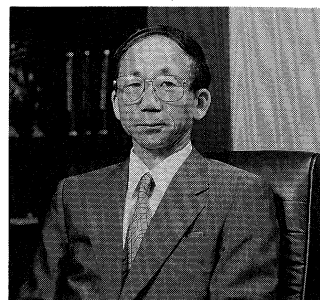
学長就任挨拶.....	2	昭和63年度留学生名簿.....	16
交換教授姉妹校滞在印象記.....	4	キャロル大学生日本滞在記.....	17
第2回大田大学研修団熊本訪問印象記.....	6	1988年国際交流EVENTS.....	18
第3回モンタナ研修団19名訪米.....	9	拡大する交流プログラム.....	18
モンタナ短期留学生報告記.....	14	国際交流委員会が新委員でスタート！.....	19

# 岩野商大学長、園田短大学長 新しく8月1日に就任

## 学長就任に際して

熊本商科大学 学長

岩野茂道



科学、技術が進み、世界は本当に狭くなりました。毎日昼となく夜となく資本やマネーが海を越え瞬時にして国境を往きかっています。しかし、このような経済交流の拡大は、それだけ経済利益に於ける国際不均衡を伴います。最近に於ける日米経済摩擦や日韓貿易問題の増大もしておりあります。このような不協和音をできるだけ小さくし、相互の友好を確保するためにも、お互いをもっともっと直接話し合う必要があります。できればお互いが相手国の言語を学び、相手国の心情を理解することから始めねばならないと思います。

このような理由から、私たち熊本学園は、高等学校から大学まで、早くから国際交流に積極的に取り組んできました。そして今後もさらに交流を発展させようと鋭意努力しております。

国際交流は、異なる習慣、異なる宗教、異なる考え方を持つ国同志が、異なる言語でつきあうのですから、当然いろいろな困難な問題にぶつかります。しかし、そのような困難を回避しては真の友好関係は生まれません。国際人となることの第一の要件は、様々な相互不理解から生じるトラブルに耐えるだけの強い体質・精神力、相手の立場を理解して受け入れるだけの寛容さを持ち合わせることにあります。

かつてアメリカは世界大戦直後、なんの対価も要求せず世界の人々を、多くの日本人を留学生として受け入れました。今幾らか経済大国として評価される立場になったわれわれは、世界の国々に対して、その恩返しをする時にきています。モンタナの諸大学、大田大学、深圳大学の姉妹校の皆さん、そして国際交流活動に携わっていらっしゃるすべての皆さん、今後とも手を取り合って国際交流の花をキャンパスに、街々に、一杯咲かせましょう。

# 国際化時代を迎えて

熊本短期大学 学長

園田 富雄



‘国際化’・‘国際交流’いろいろと言われているが、日常茶飯の言葉になってしまった割には、その意味が本当は不明確で、歯が浮くようなタッチがあるので、いろいろな人々が最近このことについて書くことが多くなってきたようである。

私どもの大学も、モンタナ・大田・深川の各大学と姉妹提携をしているが、国際交流とは何なのだろうかと考えさせられることが多い。こちらから先生や学生を派遣する。向こうからも派遣されて来る。これは相互に派遣し合っているので、本当の国際交流といえようが、国段階の国際交流、特に経済的な関係では、どちらかが一方的に輸出することだけが多くなると、国際交流ではなくなるので摩擦が生じてくる。誰かが言ったように、国際化しようとするれば、国際化されるわけであるから、コトが複雑になってくる。日本の大学の先生がアメリカの大学に雇用されるのであれば、アメリカの大学の先生も日本の大学に雇用されるのが国際化である。日本の工場が沢山アメリカに進出しているのであれば、アメリカの工場が当然日本に進出してくるし、シンガポールの会社も日本に進出してくる。これを不思議に思うようであったら、国際化はないのである。‘国際化’という言葉の意味するところは実に厳しいことなのである。

モンタナに行かれた先生や学生はかなりの歓迎をうけ、モンタナとアメリカの一部について相当の認識を持たれたと思います。今度モンタナから先生と学生がお出でになったら、同じように歓迎をし、日本について相当の認識をして貰うようにすることが、国際交流だと思う。これは大変金がかかる仕事であるし、骨の折れることではあるが、このようにして少しずつお互いの理解が深まってくる。ここで一つ忘れてならないことは、アメリカにせよ、韓国にせよ、中国にせよ、向こうの人々に日本のことをよく知って貰うためには、相手に説明をして日本のことを知らせる私たちが、先ず日本のことをよく知っておかねばならないということです。日本には向こうにないものが沢山あります。文学・芸術の世界をはじめ、その民俗・生活・歴史に亘って、私たち自身が日本について語る一つの視点を持っていることが先決です。これを外国語で表現するテクニックも持っていないといけないし、国際交流とは考えてみると大変なことです。しかし、私たちはこれに知らぬ顔をして見過ごすことが出来ない事態に直面しています。早く鎖国状態から抜け出すことが緊急課題です。

## 交換教授姉妹校滞在印象記

昭和60年6月に姉妹校提携を結んだ韓国の大田大学から、昨年度は、朴殷穆先生を第2回交換教授として本学に1年間お迎えした。また、本学からも第1回交換教授として、経済学部教授岩野茂道先生（現商大学長）が大田大学に1年間滞在し、交流が着実に深まっている。

### 大田大学印象記

#### 一わがハングルへの想いー

熊本商科大学 学長 岩野茂道

客人を迎えるこの国の人たちの暖かさを、どう表現すれば理解してもらえるであろうか。色とりどりのご馳走、素敵な女性達の陽気な歌と踊りの中に身を置いていると、何か日本人がいつの頃からか失ってしまった大切なものを、この国の人たちが大事に大事に守り育ててきているように思えてならない。

私の場合、姉妹校で商業日本語を教える交換教授ということであったが、実は最初から「教えるより学ぶ」ことを目的とした大田大学留学であった。小学生時代、クラスに数人の韓国人がいたこと、大学に入った年(1950)の6月25日、韓国戦争(日本では朝鮮戦争という)が勃発し、一時北側がプサン近くまで占領した時、対馬から来ていた友人が心配していた記憶等などもあって隣国への関心は比較的早くから伏在していた。3年前の春、姉妹校締結の準備のなかで強烈に得た印象が、冒頭に記した心厚い韓国であった。韓国語を学ばねばならない、その時そう直感した。

私は好運であった。昨年(1987)9月2日、大田に着いた2、3日後から購読を始めた日刊紙「朝鮮日報」の連載小説が衝撃的であった。崔仁浩の「失われた王国」の主題は、大和朝時代における日韓関係、とりわけ天皇史に関わる物語であった。日常会話の勉強も忙しかったが、毎朝出勤前、この物語と格闘するのが大変であった。帰国後、斑鳩の里で発見された藤の木古墳に残る見事な宝物の数々と、そこから浮かび上がる貴人の像は、この小説の世界を再現しているかのようで興味はつきない。ハングルを学び始めたことにより、私の視界が古事記の世界にまでさかのぼり、期せずしてそこから中世・近代の日韓緊張関係にまで及ぶようになった。私にとって何よりの貴重な財産となった。この1年間、時あたかも第5共和国(前全斗煥時代)非理を巡って韓国全土に学生運動が高揚していたこともあって、日本語教育も十分にはできなかったうらみもあるが、わが大田大学の、なんともさわやかな友人達にかこまれ、幸せであった。本当にありがとう。

〔昨年9月より本年6月まで大田大学滞在〕



## 思い出す 熊本商科大学の印象

大田大学 副教授

朴 殷 穆

世界的な大阿蘇の霊峰を背景にして白川が有明海をなす熊本市は、九州文化の中心地であったが、今は遠い未来を創造している都市である。

私はこの都市の名門、熊本商科大学で1987年を過ごした。この短い時間の中ですが、日本の教育を理解する機会ができた。また、日本の精神的な故郷であった高千穂を訪ね、そこで何千年も前の人々と言葉をかわすような気がした。その中で私は、日本の大学が今、世界的に飛躍する道で、熊本商大を直接体験することができ、また現代社会と大学教育の位置をもう一度確認することができた。

私は、毎日のように銀杏並木の広い道を歩いて通った。正面の赤い研究棟の威容は、この大学の学問が重く躍動しているのを現している。私はこの並木道の中を大学に通う印象的な追憶を、今は、過去の時間の中に置かなければならないが、熊本商大の学風と雰囲気をおぼろげに忘れることができない。

私は、人文学徒として熊本商大で1年を過ごしたが、大学の図書館で、私が必要とする文献資料を比較的十分に利用することができました。特に、商科系大学の図書館でヘケルの歴史哲学に現れている思想構造を検討する事は、緑木求魚ではないかという感じもあったが、これに対する資料は豊富だった。それで熊本商大の図書館は、私にとって思想を立てる肥えた土地だった。

私は、学生達の授業態度と学究熱を誉めてやりたい。彼らは20年、30年後の自画像を実現するために計画したり窮究していた。

熊本商大の教育課程は、産学連繫はもちろん、国際化時代を予見し未来を創造している。セミナー中心の教科運営を通じて、産学が協同し、国際的な面識を広くするために韓国と中国をはじめとして、西洋諸国の学問成果に深い関心を持っている。今年から大学院が新設されると、もう熊本商大は日本の大学から世界の大学へと大きく飛躍することを信じて疑わない。

今、熊本商大は世界の中で役割を果たしている。韓国とアメリカの大学とすでに教授を交換して講義、セミナーを実施しているし、アメリカには長・短期留学生を派遣している。それで私も昨年4月から今年2月までここで交換教授として講義することができた。

熊本商大で私は民主的で効率的な大学運営の姿を発見した。教務委員会をはじめとして各種委員会が大学の政策方向とか内容を選んで、大学はこれを誠実に施行する。毎週水曜日には教授会が開かれ、大学全体にかけて広くて深い論議がなされている。それに熊本商大は全ての教授と職員がひとえに効率的な教育ができるように対処していた。

様々な熊本商科大学……私はこの大学が、日本の大学としての役割はもちろん、世界の大学に成長することを堅く信じる。このような考えを持ちながら、熊本商大を後に帰国の途につく。

熊本商大の無窮の発展を祈りながら。

(昭和63年2月日本語にて執筆)

[昨年4月より本年2月まで本学滞在]

## 第2回大田大学研修団 熊本訪問印象記

今夏、韓国・忠清南道の姉妹大学・大田（テジョン）大学から、昨年が続いて2回目の研修団が来学した。今回は、学生處長の田先生を団長に、教職員11名・学生17名の総計28名が、7月25日より1週間の日程で、ホームステイを含め、本学教職員及び学生との交流を深めた。



### 日本観を変えた 熊本訪問

大田大学 学生處長  
田 壽 炳

大田大学研修団が福岡空港に到着してから、韓国へ帰るまでの1週間の間、お世話戴いた熊本商科大学・熊本短期大学の教職員の皆様並びに学生諸君に、心から感謝致します。皆様が韓国においでの際は、是非この誠意に対するお返しをしたいと思います。

日本と韓国は隣国同士ですが、過去の悲劇的な歴史のために、ごく少数の知日派を除いて、殆どの韓国人は日本を身近に感じていません。

短い期間でしたが、日本に対する印象はすっかり変わりました。これは皆様から大変親切にして戴いたというばかりではないような気が致します。私は以下の様な理由で、日本人に対し尊敬の念を抱くようになりました。

1. 日本人に、積極的に外国人との交流をしようという強い意思を見出すことができた。今日の日本人は、50年前の帝国主義を唱えた人々とは違うことを私自身の目と心で感じた。
2. 熊本市は、膨大な車の量に比して道路が狭いように感じたが、車が警笛を鳴らすの

は聞いたことがないし、また、観光地を含め町がきれいだったことが印象的であった。日本人は、公衆道徳や秩序をよく守る国民だと思った。

3. 熊本城、水前寺公園、伝統工芸館の造成及び運営などを見て、日本人は先祖から受け継いだ文化遺産を愛する国民だと思った。つまり、教育とか国民精神の正しい確立という側面から見れば、日本人は優秀な国民だと思う。

韓国は日本からいろいろと学ぶことが多いと思います。これからも両校の交流がますます発展することを期待しています。最後に、いろいろとお世話をして戴いた学長先生、国際交流室の方々、研究所の皆様に、心から感謝致します。



### あたたかい町 く・ま・も・と

英文科4年  
辛 安 株

日本から帰国した友人とともに、日本の様々な事について語り合ったことがありました。その時の友人の話によれば、「日本人は親切であり、特に日本の女性はやさしく礼儀正しい。」とのことでした。その話を聞いた時、私の心の中に少々反日感情がわき起こり、「親

切さは日本人気質であり、表面だけのかざりの親切じゃないか。」と思いました。

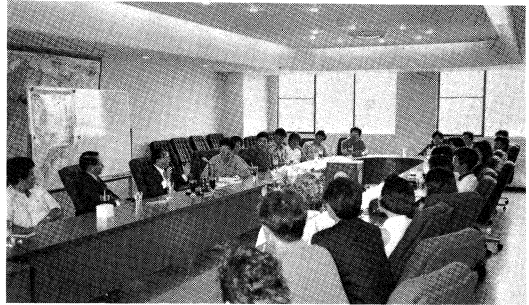
ところが、私の考えが間違っていたことに気づく機会が与えられました。この夏、私は我校と姉妹関係にある熊本商科大学・熊本短期大学を訪れ、私達大田大学の学生は、一日ホームステイをしました。私を迎えてくれたのは、竹下栄喜さんという大変やさしい方でした。栄喜さん宅では、おじい様や親戚の方々まで来られて家族全員で私を迎えてくださったのです。家に入ると、皆さんが正座して挨拶され、また、私の目の前にはいろいろなごちそうが並んでいました。後で知ったことですが、そこには馬刺も並んでいたのです。

栄喜さん宅はスポーツ用品店で、古い建物でした。その夜、栄喜さんと私は、彼の友達と居酒屋へ行きました。そこで私が見た居酒屋の雰囲気は韓国と少々異なりびっくりしました。韓国ではにぎやかに酒を飲みかわしますが、日本人は大変静かに酒を飲んでいたので、また韓国では精算する時、割勘ということはあまりしません。目上の方が払うのが普通です。少々カルチャーショックを受けました。

翌日、朝から皆さんがいろいろと気づかせてくださり、朝食も、韓国の食卓を思い浮かべさせるようなメニューが並んでいました。食後、栄喜さん一家に別れを告げることになりました。その時、栄喜さんの目に浮かんだ涙を見て、心から感動をおぼえました。彼等の親切と暖かい心というプレゼントを受け取ったように思ったからです。

熊本城を見学した時、幼い子供達と偶然一緒になりました。子供達が、秩序正しく長い

石段を上って行く姿を見ながら感心していると、もっと驚くことができました。引率の先生が、「どうぞお先に。」と、道を譲られたのです。子供たちも、当然のごとく道をあけてくれました。こんな小さい子供までがマナーをわきまえるように、日常の生活の中でマ



(特別講義に熱心に聴き入る研修団)

ナーが教えられているのです。これが日本人であり、このことが日本を動かす力ともなっているのではないかと思います。

最後に、私達の面倒をみて戴いた学長先生初め諸先生方、国際交流室の方々や留学生の皆様から感謝致します。そして日本を身近に感じさせてくださった栄喜さんの御家族に感謝申し上げます。



## 心のゆとりを持ちたい

法学科2年

鄭錦淑

熊本のあちらこちらを見物し、沢山の日本人と出会ってみて、私は日本人よりも韓国人の方がより豊かな生活をしているのではないかと思います。だが、その私の考えは間違っていました。日本人には我々の中には見つけることができない「ゆとり」がありました。それは日本人の生活の深いところに、「純粹

さ」「暖かさ」というものがあるということです。日本人は、人間にとって必要な「ゆとり」を持っているように思います。私の目には、日本人は自分のことを楽しんでいるように映り、韓国人のような緊迫感がなかったからです。

「日本は土地が狭いので、家を大きく建てられません。」とおっしゃった日本人の先生の言葉が、私の頭に浮かんできました。韓国は日本より土地が狭いのに、どうして大きい家が建っているのかしらと思いました。他人のことを考える「ゆとり」、いえ、これは必ず共存共生するという思考方式の発露だろうと思います。それが私の目には「ゆとり」と見えるのです。うらやましい限りです。日本

へ行く前は、日本人をあまり良いとは思わなかったのですが、日本の観光を終えて帰国した今は、今までの私の考えが間違っていたと思っています。

韓国の人々に、日本についていろいろなことを話しています。思い出に残っているのは、日本人のすがすがしい「ゆとり」と、広い包容力です。もし私が日本人の一面だけを見て、間違った判断をしたとしても、私が感じたことは韓国人には必要だと思っています。

最後に、いろいろ面倒をみて戴いた商大・短大の先生方、職員の方々、並びに学生の皆さんに心から感謝しています。

ありがとうございました。

### 大田大学研修団日程表

月 日	朝	昼	夜
7/25(月)	福岡空港到着 → 熊本 歓迎会		
7/26(火)	本学学長表敬訪問 学部・科代表者との懇談会 キャンパス見学	熊本市内観光及びショッピング  学生間スポーツ交流(バレーボール)	
7/27(水)	県知事表敬訪問 R K K 訪問	特別講義受講	ホームステイ(学生) 引率者歓迎夕食会(教職員)
7/28(木)	天 草 終 日 観 光		
7/29(金)	本田技研見学	阿蘇観光	送別会
7/30(土)	終 日 自 由 行 動		
7/31(日)	福岡空港出発		



## 第3回モンタナ研修団19名訪米

—多彩なプログラムで交流—

### モンタナ・サマープログラムを 振り返って

商学部助教授

古田 龍助

1983年に本学とモンタナ州立大学(MSU)との間で開始された隔年サマープログラムも、早いもので今夏で3巡目を終えました。このたびの第3回モンタナ研修団は、商大・短大合わせて15名の学生諸君、落合俊行助教授(交換教授としてMSUに滞在中)、学生課の坂田勝征課長補佐、国際交流室の鶴田智子さん、そして団長の私というメンバー構成で、33日間にわたって多彩な行事や訓練をこなしてきました。この間、多くの人々のお世話になりましたが、シアトル到着からMSUを去るまで絶えずお付き合いいただいたカラハン博士(MSU客員教授)には、とくにここに記して感謝したいと思います。

さて今回のサマープログラムの特徴は、さらに内容充実をはかるためにいくらかの変更が加えられたことでした。具体的には、プログラム全体の教育面をより強化するため、研究プロジェクトという課題が導入され、英会話レッスンの時間数も増加されました。それともなって、サマープログラムに対する予算も大幅に増加され、学生一人当りの旅費の約半額にあたる25万円を大学と同窓会が援助することになりました。この援助金のせいで参加希望者が多数にのぼることが予想され

たので、英語試験と面接による選考を準備していたところ41名が応募し、その中から募集人員数の15名が選抜された次第です。

ここで研究プロジェクトですが、これは個々の学生の専攻や興味に応じて特定の社会・経済現象を選び、それにかんして日米比較を行なうもので、学生たちはMSU滞在中に、面接や質問紙によってデータ収集をしなければなりません。もちろん、面接といっても多くの場合通訳なしでは無理でしたが、学生たちを現地の人々の中に飛び込ませ、日米の違いを真剣に考えさせる手段として有益だったと思います。その成果は収集したデータに基いて帰国後にまとめられ、研究報告書として提出されることになっています。

参加学生たちの多くにとって今回の渡米が初めての海外旅行であったため、この研究プロジェクトを通じてだけでなく、日々いろんな場所で新しい体験をするごとに、彼らは何かを学びとったことだと思えます。そしてそのような学習が、彼らの今後の人生に対して有形無形の好ましい影響をおよぼすことを、引率者代表として私は願ってやみません。



## 研修旅行終了によせて

経営学科3年

上原明弘

私がこの研修旅行で特に力点を置いたのは、リサーチとMSUの学生との交流の二点です。これまで、講義や教科書を丸暗記するだけの教育しか受けてこなかった私にとって、今回MSUにおいて各自リサーチを行うという課題は海のものとも山のものともつかぬ調子で、それに対する戸惑いと不安は大きなものでした。実際の現象を客観的にとらえ、それを合理的に要約し、その中に介在するプロセスを確認するというリサーチの方法は、これまで私の受けてきた教育課程には存在しなかったものだったのです。MSUの学生によると、彼らは専門課程（3年次以降）に入ると、もっぱらこの型の学習、すなわち基礎学習の後に何らかのある実際の現象を教材にケーススタディによってその論理を習得していくということでした。日本の講義中心のそれとは随分と違うようです。このようなリサーチなど初めてのことでしたから、何から手をつけてよいのやらわからずに、とりかかるとにかなり手間取ってしまいました。

私のテーマは『米国学生の大学選択プロセスの考察』でしたので、団長の古田龍助先生の助言を得て、先ず学生に直接聞いてみようということでアンケート用紙を急きょ作成しました。

いざアンケートを取る段になると、夏休みということもあって、道ゆく学生にちょっと声をかけるにも、肝心の学生がつかまらない始末でした。そこでモンタナ州立大学自治会会長のトム・アプトン君と副会長のロブ・ナイパワー君の協力によって、なんとか必要最

低限度数は確保することができました。この自治会の二人には、特に親しくつきあってもらい、公私ともに良い友人になれました。この二人には特に感謝しており、これからも連絡を取り続けてゆきたいと思っています。

アンケートの他にも情報を得ようと、次に訪れたのがMSUの図書館でした。その機能美にはただただ目を見張るばかりで圧倒されてしまいました。特に図書の検索はほぼコンピューター化され、実に合理的に整理され、ごく簡単にかつスピーディーに希望の図書を検索できるようになっていました。さらに殆どの図書がその膨大な蔵書数にもかかわらず、ほぼ完全にオープンに並べてあって、自由に手にとれるようになっており、実に探しやすい配列されていました。おかげで、利用するのが初めての私でも、容易に希望の図書を見つけ出せました。最後に大学の入試課の職員の方にインタビューしました。いざ会見してみると、実に好意的に対応してもらえ、様々な興味深い話を聞くことができました。

このように三つの方法で、いろいろな情報を集めたわけですが、感心したのは、こちらのリサーチに関する希望に対しMSU関係者の対応がすばらしく良かったことでした。特に今回の研修中お世話になったカラハン先生の行動力は脱帽もので、ただただ感謝の一言につきます。

さて、研修旅行が終わった今、これからがリサーチの正念場といえるでしょう。研修中に収集したデータをいかに客観的にとらえ、的確に要約しうるかが腕の見せどころでしょう。またこれが私にとって有用な訓練となり得ると信じます。





(ヘレナのモンタナ州庁にて)

## マイホーム… in モンタナ

商学科3年

木 浦 香代美

8月15日、心待ちにしていたホームステイが始まった。初めての体験に、私の胸は不安と期待、それにも増す好奇心で渦巻いていた。迎えに来たのは小柄な若い女性で、彼女の微笑んだ顔が印象的だった。その微笑みを見た瞬間、不安が薄れていくのを感じた。彼女は家路の車中で、4才と1才になる女の子がいること、ご主人が出張していて、私達に会えないことを残念がっていたことなどを話してくれた。

家に着くと、子供達が出迎えてくれた。早速彼女が部屋へ案内してくれたが、その部屋は私達のためにわざわざ準備したらしく、まだ完成していないことを彼女は気にしていた。しかし、それを聞いてとてもうれしく、ありがたかった。夕食の後、日本からのお土産を渡すと、彼女はひどく感激してくれた。話をしていくうちに、彼女が日本に大変興味を持っていることがわかった。実際子供に、日本の子供向け番組のビデオを見せたり、桃太郎・一寸法師の絵本や人形があったり、彼女自身もガウンの代わりに浴衣を羽織っていた。しかし日本を訪れたことはなく、それらは彼

女のご両親の日本旅行のお土産とのことであった。私は彼女にせがまれて、子供に桃太郎を読んでやり、その歌もうたってやった。さらに彼女は、十年程前の日本を紹介した本も持っていた。それは見るからに古臭く、この時ほど現在の日本を知ってもらいたいと思ったことはなかった。そして彼女のような人にこそ、日本に来てほしいと思った。また、現在の日本の様子をうまく説明できない自分に腹が立った。そういうこともあって、次の日の夕食は日本料理をご馳走しようと思い、すきやきとご飯を作った。

子供が眠った後、私は彼女と色々な話をした。殆ど日米比較の話になるのだが、子供の教育やベビーシッターについて、私のリサーチテーマである女性の生き方について、次期大統領選挙について、日本の習慣や熊本についてなど、興味深い話がいくつもあった。私は彼女と話して、相手の意見や考え方、生活習慣を十分理解し、また日本人としての自分の意見や考え方を相手に理解してもらえよう努めることが、いかに重要であるかということ、そのためには共通の言葉が必要であるということを感じた。

最後の夜に、ようやくご主人に会うことができた。彼もまた見るからに優しくそうで、そばにいただけで楽しくなるような人だった。初めて会った人とは思えない程、私達に親しげに話しかけてくれた。その晩は、明日が来なければいいのに、とさえ思った程だった。

最後の朝食を家族みんなでとった後、お別れを言う時、言葉を出すと涙も一緒にこぼれおちそうで、何も言えずただ抱き合うだけだった。最後に彼は「君たちのために部屋を完成させて、とっておくから、またおいで。」と言ってくれた。たった4泊5日の短い期間

だったが、一番思い出深く、忘れられない日々を過ごすことができた。いつか彼らと日本で会うことができたなら、どんなにすばらしいことだろうと思う。



(グレーシャーの山小屋に到着した一行)

## モンタナ研修・ リサーチを終えて

教養科2年

平林美佐

「就職活動」、この四文字がモンタナ研修に出発する前、私の心に重くのしかかっていました。今回のサマープログラムの研修団の一人として選ばれた時、短大生では私一人が2年生ということで、この大切な時期にアメリカなどに行っている場合なんだろうかと、友達みんな暑い中ががんばっているのになどと本当に不安で一杯でした。現にこの研修団員の選考が行われる前に、事務室の方から2年生は就職活動のことをよく考えてから試験を受けるようにと言われていたので、一度は開き直っていたものの出発直前になると気ばかりあせて、どうしようもありませんでした。こんな不安な気持ちを和らげてくれたのは、今回のモンタナ研修は、大学から前回までの4倍以上もの資金援助が受けられ、さらに観光よりも「研修」というものに大幅に重点が置かれていたということです。つまり研修の後にはレポートを提出しなければならないと

いうことで、この旅行は単なる遊び半分の観光旅行ではないということでした。私はこのレポートの内容を、現在最も関心のある「日米間における学生の就職観の違い」ということに決めました。ただ何となくという安易な気持ちで就職活動を行いたくないと思っていたので、この研修に参加してこのリサーチを行うことで、何かみんなとは別の方向から、違った意味での就職活動ができるのではないかと考えたのです。

しかし、いざMSUに着いてリサーチをやらなければいけないということはわかっているものの、いったい何から始めればいいのかわからず、他のスケジュールに追われて、なかなか思うようにいかずに困ってしまいました。私達の大学の就職課にあたる「キャリアサービス」に、話を伺いに行く日に、通訳としてついてきて下さる予定だった古田先生と会うことができず、何とかなるだろうと一人で行ったところまではよかったのですが、親切に話をして下さっているにもかかわらず、英語をよく聞き取ることができず、結局、漠然としたことしかわからずに帰って来てしまいました。この時はあまりにも自分の語学力の無さに落ち込んだりもしましたが、これではいけないと思い、学生会館や図書館にいる学生にかたっぱしから話しかけていってアンケートに答えてもらいました。この時のことが一番印象深く、どう見ても積極的とは言えない性格の私が、よくあんなことができた自分でも驚いているくらいです。このような具合で、大学から援助を受けただけの成果があがったという自信は全くありませんが、このリサーチという私達に課せられた義務は、何かしら私に、出発する前には無かった一面を引き出してくれたような気がします。就職

活動はこの1ヶ月間できませんでしたが、今はこのことで何か自分が一つ成長したような満足感で一杯です。

短大2年生という学生生活最後の夏に、こ

のモンタナ研修に参加できたということは、これから社会に出る私にとって大きな糧となったと思っています。

### モンタナ研修団日程表

月 日	日 程	宿 泊
7/31 (Sun)	成田 → シアトル Pike Place Market 等見学	UW寮
8/ 1 (Mon)	シアトルで新聞社・デパート・ワイン工場・鰻養殖場見学	〃
2 (Tue)	シアトル → ミズーラ	UM寮
3 (Wed)	マンズフィールドセンター訪問 東洋大学生とバーベキュー	〃
4 (Thu)	カリスベルへ 地元商工会議所の方々との会合	モーテル6(カリスベル)
5 (Fri)	グレーシャー国立公園での山登り	山小屋
6 (Sat)	山下り カリスベルへ	モーテル6(カリスベル)
7 (Sun)	ヘレナでロデオ・Gates of the Mountains 見学	モーテル6(ヘレナ)
8 (Mon)	州庁・商工省訪問 キャロル大学訪問 ボーズマンのMSUへ	MSU寮
9 (Tue)	リサーチ開始	〃
10 (Wed)	商工会議所訪問 MSU国際教育局長・自治会学生と会合	〃
11 (Thu)	英会話演習開始 特別講義 図書館見学	〃
12 (Fri)	Film & Television Center 見学	〃
13 (Sat)	イエローストーン川下り	〃
14 (Sun)	MSU歓迎会	〃
15 (Mon)	MSU国際ビジネスクラブとの会合	ホームステイ
16 (Tue)	Bozeman Hot Springs 見学(希望者)	〃
17 (Wed)	Lewis & Clark Caverns 見学(希望者)	〃
18 (Thu)	ホストファミリーと終日自由行動	〃
19 (Fri)	イエローストーン国立公園観光	山小屋
20 (Sat)	〃	〃
21 (Sun)	〃	MSU寮
22 (Mon)	終日リサーチ	〃
23 (Tue)	ボーズマン企業訪問 バーベキューパーティー	〃
24 (Wed)	お別れパーティー	〃
25 (Thu)	ボーズマン → ロスアンゼルス 終日観光	ホテル
26 (Fri)	自由行動	〃
27 (Sat)	〃	〃
28 (Sun)	ロスアンゼルス→ サンフランシスコ 終日観光	〃
29 (Mon)	自由行動	〃
30 (Tue)	〃	〃
31 (Wed)	サンフランシスコ → 成田	機 内
9/ 1 (Thu)	成田 → 福 岡 → 本学	〃

# モンタナ短期留学生報告記

## Different Society

〔派遣先：キャロル大学 2月～3月〕

経済学科4年 竹下 栄喜

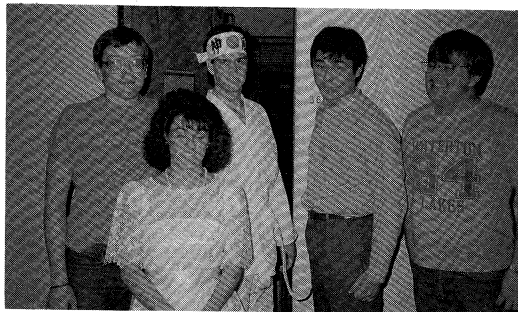
私は、モンタナ州のキャロル大学に2ヶ月間の日程で留学しました。

アメリカは私がイメージしたとおり、大地は果てしなく広く、空は紺碧で、しかも自然が豊かで雄大でした。

キャロル大学の学生は目的を持って大学に進学した者ばかりで、授業に対する姿勢が日本の学生と違っていました。みな積極的に授業に参加しています。特にゼミナールはいつも白熱し、発表者は質問攻めにあい、それを一つ一つ返答していかなければなりません。また、授業は日本に比べるとハードで、レポート及び小テストが頻繁に行われ、学生はそのための準備として、毎日少なくとも3時間は勉強しています。

学生は、ほとんどの者が何らかのアルバイトをしています。働いて得たお金は、全て授業料や寮費などのように、勉学のために使っています。家が裕福な学生も、親は親という考え方で、アルバイトをしなければなりません。いわゆるスネカジリは、アメリカでは通用しないのです。

アメリカは、個人主義の社会を形成しています。それに対して日本は、集団主義の社会を形成しています。双方とも良い面・悪い面があります。アメリカの良さは、“十人十色”という言葉があるように個性豊かな人間がたくさんいて、個人の行動に責任を持たせます。また、アメリカは実力主義の社会という点で、人々にはチャンスがあり、夢をもって生きる



（キャロル大学の友人達と）

ことができます。しかし、悪い点として、あまりにも個人主義に走り過ぎて、利己的な考え方をする人が多いように思われます。

日本の場合には集団主義という事で、個人の個性が画一化されています。日本は実力主義の社会ではなく学歴社会という点から、チャンスを得る機会が極めて難しく、人々は夢もなく漠然と生きているように思えます。良い面として、アメリカに比べると利己的な人が極端に少なく、安心して生活できるというメリットがあります。

今回のアメリカ短期留学を通じて、たくさんの事をいろんな人々から学びました。今後の私の人生において役に立てたいと思っています。

## アメリカの学生に学んだもの

〔派遣先：モンタナ州立大学 2月～3月〕

経済学科3年 坂本 道哉

モンタナ州立大学への短期留学を終え、すでに5ヶ月が過ぎてしまいました。1ヶ月半という短い期間ではありましたが、そこで私は、一年分にも二年分にも相当する様々な経験をしてきました。

初めて踏み異国の地、そこで知り合った人達、そして我が国と違う風習。毎日の生活がとても新鮮で楽しく、また、学ぶことも多くありました。その中で一番私が感銘を受けた事は、学生達が何事に対しても、常に熱心であるということでした。講義一つ取り上げてもその姿勢がよくわかります。私は大クラスによる授業と小クラスによる授業の二つを履修しました。小クラスの授業はゼミと全く同じで、学生の一人が発表して、その内容について質問を受けるという形態をとっていました。私がとても驚いたことは、担当者のリサーチの量のすごさです。資料カード50枚にレポート用紙5枚、それにアンケートの結果などをまとめたプリント。その準備に3週間ほど費やしたといえます。そして、その発表を聞く学生も熱心で、皆がよく質問をしたり意見を述べたりしていました。また、教授に対して反論したりする学生も見られました。

これに対して大クラスでの授業は、大きな教室で、教授がスライドを見せながらレクチャーをされるというものでした。ここでおもしろかったのは、学生の講義の受け方です。コーラを飲みながら、ポップコーンを食べながら、ガムを噛みながらと、様々でした。でも不思議と居眠りをしている学生は見受けられませんでした。そして、ここでも皆よく質問したりしていました。中には教室の最後部から質問をしている学生もいました。このような積極性というのは、私も含めて日本の学生の見習うべき点ではないでしょうか。

日本に帰り5ヶ月過ぎた今、私は留学によって刺激され、肝に銘じたことを忘れつつあります。この体験記を書くことを良い機会とし、また新たな気持ちで頑張りたいと思います。



(MSUの友人と一緒に)

## 充実した留学生活

[派遣先：キャロル大学2月～3月]

教養科2年 吉野尚子

“Hi, Naoko!!”

キャンパスを歩いているとみんなが声を掛けてくれました。みんなが私を憶えてくれるのに、私の方はなかなかその人たちの名前と声が一一致せず、話す度に名前を聞かなければならないこともあり、すごく悪いことをしているように感じました。

キャロル大学での毎日は大変充実していました。ホームシックにかかるヒマなど、全くなかったくらいです。午前中はクラス、午後は読書やショッピング、夜はルームメイトやほかのみんなとテレビを見ながらのおしゃべり。これが私の留学中のライフスタイルでした。クラスでは、最初は言葉もわからずものおじしていましたが、コミュニケーションのクラスでスピーチをしたことにより、自分もクラスのメンバーなのだという充実感をおぼえました。それは単なる自己満足だったのかもしれませんが、それまでどちらかといえば消極的だった私が、自分から進んでクラスに参加できたということは大きなプラスだったと思います。

もっとも楽しい時間は、みんなといろいろなことを話している時でした。ルームメイトのアリーシャとは将来のことなども話しまし

た。そして言葉は違っても、同じような夢を持ち、同じような不安を抱いていることをお互いに感じとった時、私達は言葉のハンディを越えていました。

アルバムを開くと、ちょっと焦点がずれた写真が沢山出てきます。初めてのアメリカなのに、うまく写真が撮れなかったことはちょっと残念です。しかしその代わりにいろんな経験をし、沢山の思い出を作ることができました。



(ルームメイトと仲良しに)

### 昭和63年度留学生名簿

No.	在籍身分	氏名	国籍	受け入れ先・指導教員・研究題目
1	正規生 私費留学生	蔡明媚	台湾	熊本商科大学 商学部経営学科 1年2組
2	正規生 私費留学生	林倩穗	台湾	熊本商科大学 経済学部経済学科 1年3組
3	正規生 私費留学生	張琺姫	中国	熊本商科大学 商学部商学科 2年4組
4	正規生 私費留学生	金正翰	韓国	熊本商科大学 商学部経営学科 2年1組
5	正規生 私費留学生	楊国華	マレーシア	熊本商科大学 商学部経営学科 2年1組
6	正規生 私費留学生	周佩文	台湾	熊本商科大学 商学部経営学科 2年3組
7	正規生 私費留学生	陳亮宏	台湾	熊本商科大学 経済学部経済学科 2年2組
8	正規生 私費留学生	林鑫生	台湾	熊本商科大学 商学部経営学科 4年1組
9	正規生 私費留学生	韓相姫	韓国	熊本短期大学 教養科 1年2組
10	研究生 私費留学生	姚耘	中国	熊本商科大学 商学部経営学科 担当 勝部伸夫
11	研究生 私費留学生	黄踴鴻	中国	熊本商科大学 商学部商学科 担当 平岡賢司
12	研究生 県費留学生	小代善美 キャサリン	米国	熊本短期大学 教養科 担当 赤井恵子
13	研究生 私費留学生	孫碧蓮	中国	熊本短期大学 教養科 担当 吉岡 泰夫
14	研究生 私費留学生	江源	中国	熊本短期大学 教養科 担当 春口 光義
15	聴講生 私費留学生	呉慶煥	韓国	熊本商科大学 商学部経営学科
16	聴講生 私費留学生	袁鉄錚	中国	熊本商科大学 経済学部経済学科



# 親愛なる熊本の皆さんへ

## キャロル大学生日本滞在記

トッド メリル

帰国してから、何度も日本のことを思い出す。特に楽しく思い出すのが熊本である。そこで感じた皆の心配りは、日本人というものを実によく物語っている。日本人が、利己的な国民だなんてとんでもない！ 僕のホストファミリーや友人達は、僕が楽しく過ごしているかどうか、いつも気遣ってくれた。おかげで本当にいつも居心地よく、快適に過ごさせていただいた。

コミュニケーションは、時々不自由さもあったが、親切な御行為は言葉よりも雄弁であった。国際交流室では、多大なる時間と労力を割いて僕達への日本語教育にあたってくれた。日本語は、決して易しくはなかった。しかし、日本語を学ぶ機会を得て良かったと思う。言葉が全くわからなかったなら、日本を旅行するというは無理だったからだ。実は、帰国してからも日本人の友人達から日本語を習っている。次の来日までには流暢に話せるようになっていたい。

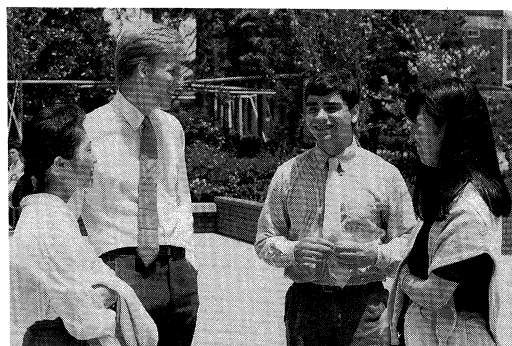
そして次の目標は、日本料理を習得することだ。僕が何といても一番恋しく思っているのは、日本食である。日本食は、“食の喜び”そのものである。北原先生、アメリカに来られた折には、いつでもディナーの御招待お受けしますよ。日本で食べた物は、全部おいしかった。特にいか、たこ、うなぎがおいしかった。

熊本を出てから、広島、京都、奈良、箱根、そして東京などを廻った。特に印象に残ったのは、宮島、皇居、富士山、そして数々の寺院や神社である。それらは何人にも畏敬の念を抱かせずにはおかない厳かさを持ち、そこで出会った人々も、印象深い人々であった。

最後に、僕が日本滞在中を楽しんだように、モンタナ訪問の一団も米国滞在中を楽しまれたことを望む。ごちそうして下さいました人々、日本語を教えて下さった人々、僕の仲の良い友人となった人達、いろいろな形で僕をお世話して下さいました人達、そして北古賀前学長への感謝は、十分に表しきれものではない。もし僕が感謝している人々、一人一人の名前をあげれば、一冊の本が出来上がるくらいである。

訪米する日本の皆さんも、このような親切をアメリカで受けられることを切に願ってやまない。これからもおたがい連絡をとりあいましょう。アリガトウゴザイマス。

〔日本滞在期間は6/2～7/31〕



(本学学生と談笑するキャロル大生)

## 1988年 国際交流EVENTS

日 付	モン タ ナ	大 田
2月 7日	春期短期派遣留学生 出発	
23日	.....	朴殷穆先生(交換教授) 離熊
3月31日	春期短期派遣留学生 帰国	
4月 5日	落合俊行先生(交換教授) 出発	
11日	.....	
14日	.....	
5月21日	モンタナ州東京事務所日本代表者 来学	
25日	.....	
27日	.....	大田大学訪問団 出発
29日	.....	大田大学訪問団 帰国
31日	.....	
6月 3日	キャロル大生 来熊	
29日	.....	岩野茂道先生(交換教授) 帰国
7月 4日	.....	
18日	キャロル大生 離熊	
25日	.....	大田大学研修団 来熊
31日	モンタナ研修団 出発	大田大学研修団 離熊
8月25日	田中久博君(長期交換留学生) 出発	
9月 1日	モンタナ研修団 帰国	
8日	.....	
11日	.....	
20日	.....	金寛洙先生(交換教授) 来熊
26日	.....	
29日	.....	
10月 3日	.....	
24日	.....	大田大学訪問団 出発
26日	.....	大田大学訪問団 帰国
12月 1日	.....	
5日	.....	
12日	.....	忠清南道諮問委員会 来学(団長:大田大)

## 拡大する交流プログラム

昨年末12月19日に中国・深圳大学との間に姉妹校提携が結ばれ、交流協定に基づき本年より交換留学生制度がスタート、9月に2名の学生を派遣した。モンタナ州の方とも四大学間交流プログラムの協定書調印が本年1月に完了し、中国と同じく9月より長期の交換留学生を派遣中。

韓国・大田大学とは、本年度当初より交流内容の見直しが進められていたが、10月に新たに交流協定書が交わされ、現在、この新協定により大田大学から金寛洙教授が交換教授として本学に滞在中。本学からも来年度宮崎俊策短大教授が大田大学にて研究の予定。

深 圳	そ の 他
<p>..... 深圳大学答礼訪問団 出発</p> <p>..... 深圳大学答礼訪問団 帰国</p>	
<p>..... 深圳大学研究調査訪問団 来熊</p>	
<p>..... 深圳大学研究調査訪問団 離熊</p>	
<p>..... 松山泰広君(長期交換留学生) 出発</p> <p>..... 高木浩規君(長期交換留学生) 出発</p> <p>..... 深圳大学訪問団 出発</p> <p>..... 深圳大学訪問団 帰国</p>	<p>..... 桂林市婦人友好代表团团长 来学</p>
<p>..... 深圳大学訪問団 出発</p> <p>..... 深圳大学訪問団 帰国</p>	<p>..... 桂林市教育代表团 来学</p>
<p>..... 深圳大学訪問団 出発</p> <p>..... 深圳大学訪問団 帰国</p> <p>産学長)</p>	

+++++ 国際交流委員会が新委員でスタート! +++++

昭和63年1月より国際交流委員が下記のメンバーに交替した。

(敬称略)

国際交流委員長 清 野 健

国際交流委員

商 学 部 古 田 龍 助 勝 部 伸 夫

経 済 学 部 山 内 良 一 慶 田 收

教 養 部 永 末 嘉 孝 林 日 出 男

短 大 中 野 いく子 原 口 行 雄

事 務 局 総務課長 山下清司

国際交流室 西村禮二 鶴田智子

○国際交流委員会メンバー

清野 健・古田龍助・勝部伸夫・山内良一・  
慶田 収・永末嘉孝・林日出男・中野いく子  
原口行雄・山下清司・西村禮二・鶴田智子

○「国際交流レター」編集委員

山内良一・原口行雄・西村禮二・鶴田智子

---

熊本市大江2丁目5番1号

**熊本商科大学**

**熊本短期大学**

〒862 TEL. (096) 364-5161

---